

歌集 二の宮の空

昭和五十四年十一月三日発行

発行者 松本トク枝

埼玉県行田市清水町一番一二二号

印刷者 今津印刷所

埼玉県行田市行田十二の二十二

幼な孫の靈弔ふと老いし身に
慕しさこめし歌集ささぐる

昭和五十四年浅春

行田短歌会長

湯 本 嘉 秀

さきたま短歌会長
歩道短歌会々員
日本歌人クラブ会員

序

孫は子より生れて子より可愛いとはよく言ったものである。私も今や老境に入って八人の孫達に囲まれてゐる現在なので、この心境は痛い程共感しうる。

松本登久枝さんの可愛い女孫の理恵ちゃんが、小児喘息の療養の為に二の宮の国立小児病院に入園された事は、会ふ度々に何時も話題にされた。そして見舞ふ度毎に非常に喜んでくれるのではあるが、必ず帰りの時刻が来ると何処かに姿を隠して仕舞ふのである。

「理恵ちゃんはまたどこへ行ってしまったのだろうか……」これが帰る時の何時もの合言葉になってしまった。ある時正門を出てしばらく歩いてから、何気なく振り返ると、そこに物蔭からさびしうに見送つてゐる理恵ちゃんの可愛い姿を発見したのだと云ふ、その幼い可憐な心情に泣けて泣けて涙のとどまるところを知らなかったと云ふ。あまつさえ感冒の併発によって昇天されたのである。

お母さんの暖い懷ふところに抱きつづけられて亡くなったのであればとも

かく、五才六ヶ月の幼い魂が独り淋しく園のベツトに消えたと云ふ、おばあちゃんの松本さんには 又、その事が不憫で不憫で哀れで悲しいのです、とも云ひせめて理恵ちゃんの霊が思ひ出す人々に甦って下さるのであれば、例令拙い歌集にせよ理恵ちゃんの冥福の為に出版したい、それが現在のおばあちゃんのなし得る供養であり、歌集名も「二の宮の空」にしたい……等々の相談を受けた。私も深く共鳴して協力を惜しまなかった。併せて松本さんの多彩な人世行路を歌日記的に綴る事にした。

何卒御縁あってこの歌集を繙く方々には幼くして昇天した理恵ちゃんの御冥福を祈って下されば幸甚である。

昭和五十四年新緑の頃

湯 本 嘉 秀

目次

短歌一首
湯本嘉秀
序
湯本嘉秀

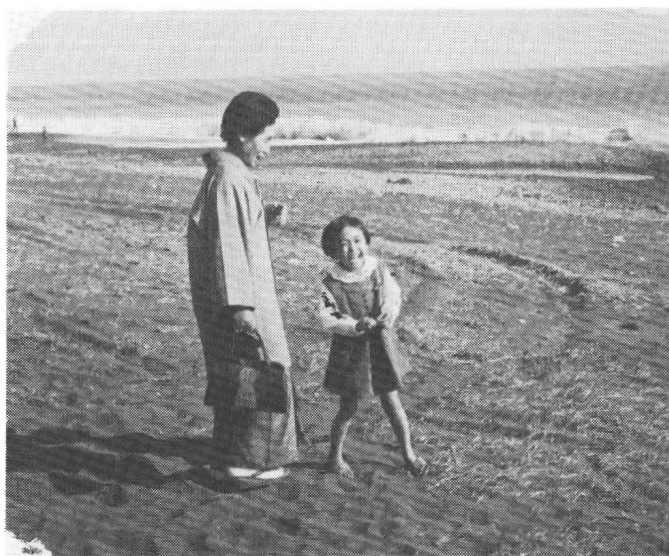
二の宮の空	7
卒寿	17
米寿	18
菩提寺への径	26
アメリカへ発つ	37
芙蓉の花	46
行田階上駅	51
四ツ手網	56
切干大根	61
甘き柿の実	67
五十鈴川	72
ふるさと	77
夏祭り	82

北海の旅	88
五浦の海	96
演奏会	100
潮來の面	107
八丈太鼓	111
一色の凧	115
ペタルの音	122
焼諸の香	126
奥秩父	130
古峰ヶ原	136
高原の霧	145
想出の佐渡	154
お茶がらの音	159
蒲団はたき	165
あとがき	174

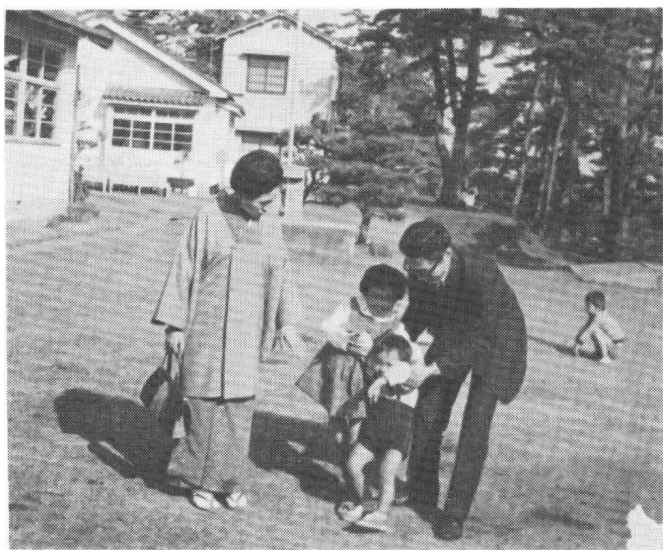
この一篇を亡き初孫 松本理恵
(昭和四十一年十二月二十六日―五才六ヶ月)
の霊前に捧ぐ

二の宮の空

松本登久枝



昭和41年11月13日
二の宮海岸にて理恵



いつまでも遊びはつきじ黄昏れを
振りむきかへる秋風のなか

昭和四十年秋十一月二十日面会に行く
神奈川県二の宮町国立小児病院入院

われなれば抱き眠らん幼な孫の遠き施設にひとり起き伏す

門限の刻来りなば（四時）愛し孫は姿かくして見えかくれする

幼な孫と今を限りに遊びつつ別れを告げん刻のせまりく



遙かなる海原遠くかすみつ
つ真砂に遊ぶ親子の明るし



長袖の服持ち行けば喜びて理恵
は少しもわがそば離れず

駅までの道を歩めば理恵の顔の頻り浮びて涙あふるる

十二月二十五日午後十二時五十分
寝れ得ぬ夜半の静寂を破ること受話器につたふ理恵の危し

悲しみをいざなふ如く秋の夜の雨音静かにわが心うつ

十二月二十六日朝八時（私の誕生日）

ひたすらに無事を祈りて二時間の口唱終へし時理恵は世を去る

すやすやと寝れるごとくいとほしく幼の理恵の天にのぼれり

夢さめぬありし日たどれば逝きし孫の懐しの声ふと甦^かへりくる

初孫の拾参回忌は巡り来し奇しくも今日はわが誕生日

五十三年十二月二十六日

喜びも悲しきことも世の慣ひ心鎮めて香華たむけん